

故パール判事が尊敬したガンディーは
日本の戦争と原子爆弾をどう観たか？

1942年6月5日、ルイス・フィッツシャーとの対談でガンディーは語った。

「イギリスもアメリカも他の国も、その軍隊を駐留させてインドの領土を軍事作戦の基地に使うのはよい。日本がこの戦争の勝利者にはなっていない。枢軸国に勝ってほしくない。しかしまた、インド人民が自由の身にならないかぎりイギリスにも勝利はない。インドを支配しているあいだ、イギリスは道徳的に擁護しようがないのだ」。

1942年5月31日、『ハリジャン』紙に書いている。「憎しみは憎まれる側でなく憎む側を傷つける。・・・英軍を撤退にみちびくほどの精神の強さを育てて憎しみと絶縁するよう訴えている。英軍が撤退すれば、日本軍を歓迎する動機も消える。インドの何百万人は、適切に組織されれば、新旧のどんな武器もなしに日本に抵抗できるのだ」。

1948年1月30日、暗殺される数時間前だが、『ライフ』誌の特約記者マーガレット・バーク＝ホワイトに「原子爆弾に非暴力はどう立ち向かうのか」と問われたガンディーは、「わたしは地下に降りない、防空壕に入らない。空き地に出て、私が一片の悪意ももたないであることをパイロットに見せる。勿論、そんな高度からは私たちの顔は見えない。しかし、わたしたちの心にある希求、わたしたちに危害を及ぼそうとしてやって来たのではありませんようにとの祈りがパイロットに届いて、彼も開眼するかもしれない。ヒロシマで殺されなかった何万もの人びとが、そういう祈りを胸に行動していたら、その犠牲は無駄ではなかっただろう」。

「非暴力は原子爆弾が破壊できない唯一のもの。一発の原子爆弾がヒロシマを廃墟にしたと知った時、わたしは狼狽しなかった。わたしは、世界が非暴力を採用しないかぎり、人類の自殺は免れない、とわが身に言い聞かせた」。

1946年2月10日、『ハリジャン』紙に彼は

書いていた。「世界は社会的・政治的大変動を経てきた。わたしは、それでも真理と非暴力に対する信奉にしがみついたか？原子爆弾はその信奉を粉砕しなかったか？そんなことはなかった。逆に、この真理と非暴力の双子は世界で最も強大な力の根源であることを明瞭に示したのだ。この双子の前で原子爆弾はなんの効果もない。対立する二者は本質においてまったく異なる。一方は道徳的・精神的なもの、他方は物理的で物質的なもの。一方は他方より無限に優越する。他方には本性上、終わりがある。精神の力は常に進歩的で終わりを知らない。・・・さらに、この力は万人に、男、女、子ども、肌の色に関係なく、万人に内在する」。

1946年7月7日の『ハリジャン』紙で、「わたしの見るところ、原子爆弾は何年ものあいだ人類を励ましてきた最も繊細な感情をそいでしまった。これまでは、そういう感情を許容する、いわゆる戦争法規があった。今になって知るのだが、戦争が承知する法とは力の法だけなのだ。原子爆弾は連合軍に空疎な勝利をもたらした。当分は日本の魂を破滅させた。破滅させた側の魂がどうなるかは、時を待たねばならない。・・・日本の強欲は決してほめられたものではなかった。その野心が相対的に大いなる無価値だからといって、小さな無価値の側が日本の男女・子どもたちを情け容赦もなく破滅させる権利などない。原爆の無常の悲劇から引き出すべきモラルは、暴力は対抗暴力によって破壊できないように、原爆は対抗爆弾では廃絶できないということだ。人類は非暴力によってのみ暴力から脱却できるのだ。憎しみは愛によってのみ克服できるのだ」。

1925年10月8日、『若いインド』への一文は、まるで日本国憲法の可能性を語るみたいだ。

「全般的軍縮が始まる前に、ある国家が軍縮を断行し大きな危険を冒す必要がある。その国家の非暴力のレヴェルは当然高まって世界中から敬意を払われる。その判断は誤ることなく、決定は確固として、英雄的自己犠牲の能力は大きく、自国のためにも他の諸国のためにも同じように生きたいと思う」。